

芥川だより

発行日 * 2023年4月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



困難に立ち向かう事こそ、私の生きる意味だ

山の遭難事故の原因の一つに道に迷った結果というのがある。道に迷って疲れ果てた時には楽な選択をしやすい。少しでも早く帰りたくなり訳も分からず下りだす。日本の山では、山を下ると沢に出る、開けた沢でも下って行けば滝が待っている。滝を下降するのはかなり難しいから事故を起こす。

道に迷った時には、元来た道を引き返す、それが困難なら高い方向に登り尾根筋にでる。身動きできない状態であれば、動かずに捜索隊を待つ。体力の温存が大事

だ。バタバタしない。

生きることは大変だ、歳を重ね病弱になれば早く死にたいと弱気になる。婆さんを自宅介護で看取った経験から寝たきりになればもう終いだ、何もできない。もう死んだも同然であるから、早く死にたいと思うのは当然だ。

足腰が痛いから歩かない、すると筋肉が弱りさらに歩けなくなる。こんなことは常識で誰もが知っているが、実行する人は意外と少ない。同じように身の回りの嫌な事嫌いな事を無視し考えないようにする。しかし、時間が進むと問題は深化しながら大きくなる。

親しかった警備員が来なくなったので、関係者に話を聞くと梅毒系の病気にかかって手足の肌がボロボロにただれていて体力も弱ったので辞めたという。本人に病院に行くようにすすめるが頑として行かない。元気だった70歳の爺さんが梅毒になり内臓も侵され神経もやられ、よろけて立てないとは、彼のやる気に感心していただけにやるせない。

嫌な事、嫌いな事などいくらでもあるが、少しでもそれらと向き合い生きる事こそ今生きている意味ではないかと考える。その大きな問題のひとつに政治をつくる選挙がある。選挙に行かないのは、死に体と同じではないか。

死をめぐるあれやこれ(101) 石川 吾郎

岸田内閣の少子化対策は誰のためか

岸田内閣は「異次元の少子化対策」のたたき台なるものを発表した。子育て支援としては、①児童手当の所得制限を撤廃して高所得者まで支払うとする。②年齢制限を十五才から十八才まで延長する。③育児休業したときの給付金を手取り100%にする。これは手取りの高い人にも同様に支給することになる。これ、それはそれで意味はないだろう。しかしこういった政策では少子化対策には効果は期待できない。◆そもそも最大の問題は、収入が低くて若者が結婚できなくなっているという現状だ。年収が高いと結婚率は上がる。年収500万以上では50%以上だが、若者の多くを占める年収百万の後半の層では15%未満となる。結婚をして子供をもつことは経済的にこれだけ困難になっている。ここを底上げしないと若者は結婚できず、子供も生まれにくい。休業保障にしても給料の低い人には少ししかもらえない。収入の低い独身者や専業主婦にはそもそも恩恵は全くない。◆片親などでの子育て困難など、子供をとりまく貧困がひどい。まともな栄養のとれる食事が給食だけになった子供は多いと聞く。今すぐにも必要な対策は「学校給食費の無料化」だ。これはすべての子育て家庭が恩恵をうける。しかし政府は給食の無償化を頑なにやろうとしない。◆さらに問題は、子育て支援の財源を社会保険料、とくに健康保険料の増額でまかなうとしてい

る点だ。健康保険料は月収百五十万円ほどを超えるとならば上がらない仕組み。これは高額所得者になるほど健康保険料の負担の割合は小さくなることを意味している。これを考えると政府の少子化対策は、高齢者も多い貧しい層から金を奪って高所得層に金を移すという構造になる。◆そもそも岸田氏は当初金融所得への課税を言っていたが、首相になつたらさつそく口をつぐんだ。金融所得の分離課税(株でどれだけ大儲けをしても税金は二十%)を撤廃して、正当な累進課税に切り替えることが重要だ。これによつてはじめて格差は正に舵をきることができるようだがこれも頑なにしようしない。◆岸田内閣は、貧困化する国民の大多数を助ける政策は、頑なに拒否をし続ける反・国民内閣というべきだろう。



芥川だより一九五号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム101	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 109	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談59	祖蔵哲	4
大峰奥駈道65	下村嘉明	6
新型コロナウイルス愚考	明石幸次郎	6
その31		
オクラの山たより79	因了生	7
隠された歴史54	満田正賢	10
道を行く 三八	成瀬和之	11
俳句	土田裕	
	影山武司	
編集後記	S K 生	14
ふみの道草58	山椒魚	15

素老人☆よもだ帳 (109)

坂本 一光

◆後藤千代喜歌句集

『底なき青き大空を』のこと

もう一人の父についても、風に返して忘れることがないように書き留めておきたい。表題の歌句集を編んだとき、私はこん

なことを書いていた。編集を終えて

ふたりの父のこと、
あるいは、私の中の私は
あなたの中の私であること

私には、ふたりの父がいる。あるいは、一人はいたといふべきか。八年前に亡くな

った実の父は、俳句が唯一の趣味で『花蜜柑』という遺句集を残した。もう一人は義父で、卒寿にして健在。この歌句集の著者である。ふたりの父が、期せずして、かたちあることばを残し、残そうとしていることに、私は不思議な気持ちでいる。

いったい、
・ことばに人は何を託すのか
・ことばに人はどんな思いを込めるのか
そして

・それはなぜなのか
と思う。

一方で強くそう思いながら、私はまた別のことも考える。私たちの中には、かたちあるものを残す人もあれば、かたちあるものを残さない人もいる。かたちがあるものなからうと、生きてきた価値はみな尊い。そして、ほとんどすべての人たちは、かたちあるものを残さない。世の中に、なまえを残したりしない。

そうであれば、私が考えるべきことは、表面的な意味でのかたちの有無では決し

てないであろう。それは要するに、かたちのあるなしにかかわらず、人は誰でも何かにその思いを込めて生きていくということであり、そのことの意味である。こんなことは至極当たり前のことであるから、普段は誰も殊更にそんなことを考えたりするわけではなからう。それでも、誰もがそのようにして生きていくならば、誰がどんな思いを何に込めたのか、私はやはり考えてみたと思う。

それにしても義父の記録は、圧倒されるほどに膨大であった。あるいは日記やメモとして、あるいは短歌や俳句としての記録が、淡々として刻まれている。その多くは日々の出来事であり、交わった人たちのことであり、折々に目にした花鳥風月であった。それでいて、なぜか、それらを辿りながら私の胸にわき起こったのは、ここに根底に流れているのは生きることに対するある種の激しさであり、あるいは怒りや憤りではないだろうかという思いであった。世の中にはどうしようもないことがあり、またどうしようもあるはずのことがある。それは、おのれ自身の内にもある。誠実に筋を通して生きようとするとき、人は、どちらとも絶えずぶつからざるをえないだろう。なぜなら、小さなものから大きなものまで、瑣末なことから本質的なことまで、いつの世もいつの時代もさまざまな矛盾に満ちていたし、満ちているのだから。そうした世界で、自己を含めて世の中に対する新鮮な関心を持ち続けること、やわらか

な感受性を失くさないでいること：それが生きるということであれば、口にしようとしまいと、一方で人は激しさを怒り、あるいは憤りから無縁であることはできない。それは同時に他方で、世界のさまざまな現象事象に対する静かな感動を生み、感動はまたやさしさを生むだろう。卒寿の道を歩んだ義父の歌は、私にはそんな風に思えた。それは、二年前に、もうひとりの父の遺句集『花蜜柑』を編みながら、私の中に去来した思いでもあった。

こんなことを考える背景には、人と時代の関わりについて私なりの思いがあるのかも知れない。考えてみれば、ふたりの父は、明治の終わりから大正、昭和（亡父の場合）、そして平成の時代へと、その長い人生をほぼこの二十世紀に重ねるようにならされてきた。この世紀は、二度の世界大戦に象徴されるように、この国と世界が混沌として揺れ動き、大きく変動した時代である。そして、時代はいつでも、誠実に生きようとした幾多の人々を否応もなくのみ込んできた。しかし、同時に、時代はいつでも混沌と破壊のみに終始したわけではない。大局的に見れば、この世紀は、人類にとって偉大な進歩が成し遂げられた時代であった。少なくとも、かつてなかった新たな地平に向けて人類が大きく一歩を踏み出すことができる、そのための準備を整えた時代といわれるようになるだろう。そんな時代の中を、ふたりの父は生きてきた。そう思いながら父たちの人生と

そのうたに触れて、私は、今を生きることの意味と、せめて百年という長さで時代を見ること、時代を生きることの意味を考えた。

さて、かたちあるもの、言葉につて理屈つぼくいえば、こんな風にも思う。

(1) まず、人は言葉を媒介にして他に思いを伝える。その言葉は、書くこともあり、読むこともあり、喋ることもある。一方で、言葉を口にするのは、人と人とが向かい合った伝達の手段として重要であるが、時間の瞬間性あるいは一回性に制限されている。他方で、人が言葉を書くこと、読むことは、それぞれによく思いを深めることでありながら、これもまた自分だけの思い込みとでもいうべきある種の迷路に落ち込む危険性を伴っている。そのうえでなお言えば、人が言葉を一方よく喋り、他方でよく書いたり読んだりすることを両立させることは、案外に難しい。

(2) 次に、どんな言葉であれ、言葉の用法、表現技術は常に重要な問題である。しかし、言葉を用いて自己を表現するとき、人は直ちにいくつかの困難に直面するだろう。自己の気持ちに忠実であろうとする願いと裏腹に、胸の内を正直になることへのためらいや抵抗が生まれ心が葛藤する。そして、自己に忠実であろうと決意してみても、外でもない己の心を語るべき言葉すら持ち合わせてこなかったりかたつさに気づいたりする。未熟さを思い知ることになる。

それでも、そうした内なる困難を乗り越えて一つの表現に到達したとき、人は、ここにもう一人の自分を発見するだろう。言葉による自己表現とは、言葉による新たな自分自身の発見と確認の過程である。だから、言葉による自分探しの旅は、意識していようといまいと、人が人間らしい誇りや尊厳を持つて生きようとする限り、つまり誰にとっても生きていく限り続くものである。そこから、生きていくことへの手応えや喜びも生まれる。

そのように考えたうえで、この自己表現は他者にとって何であろうか。おそらく、個を超えたところで、読む者あるいは聞く者にとって、言ってみれば私にとっても、もう一人の自分を発見できたという感動を呼び起こすためには、言葉を通して私との共通性が生まれることが不可欠である。そのためには、自己の人生、家族、友人、花鳥風月等々の個別的または特殊的事情を扱いながら、そこに一つの普遍性というべきもの、すなわち私に通じる人間や社会や自然への考察と広がりが必要ならぬだろう。そのときはじめて、私の私にはあなたの中の私である、という一致した思いが生まれ、そう考えるとき、かたちあるものも、かたちなきものも、怒りもやさしさも、私の中で一つの感動になるのだから。

族の中で、多くを語らなかつた。いや、むしろ明治の父たちは、語ることを恥じているという風さえあった。「言わんでも分かつたらうがや」というひとりの父の口癖にそれはよく表わされていたし、もうひとりの父は、「そんなことをいちいち説明しないと分からんか」と思ったかどうか口にも出さず、一種超然として生きていくように見えた。しかし、そんな父たちに何の思いもなかつたはずはなく、その思いはあるいは俳句に、あるいは短歌にとかたちを変え実を結ぼうとしたのだろう。そこから何を読みとるのか、それは読む者に任せられることではあるが、私の到達した結論は自分でも驚くほど簡単なことであつた。

そこにいたというだけでいい
そういうひとに
わたしはなりたい
それでいいんだと、父たちは言っているように見える。

こうして、私にとって一つの仕事であつたふたりの父のうたの編集を終えるいま、そのように思わせてくれたふたりの父に出会つたことに、私は心から感謝している。そんなふたりの父に、最後にわがうたを送りたい。

終日をワープロに向かい歌打てば
父の歩みはわれに迫り来。

印度洋も太平洋も
その気になれば渡れると
十九の孫に言い残して帰る九十の爺。

殊更にも言わざりし人の詠む歌に
心の髣は幾重にもあり。

来る朝来る朝の暁を
何思いてか野を歩く
花鳥風月をただ友とせり。

読み継げばキーを打つ手のふと止まる
父の歩みし人生は
わが人生かと切なくもあり。

見上げれば時代に向かうごとくにて
遙かにも立つ山々のあり。

一九九四年六月
願わくば、義父が、白寿の嶺をも
越えられんことを祈りつつ

(かたちは心であり、心はかたちになる ■
大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(59)

祖蔵 哲

『反出生主義の哲学』

先月号で米国大統領がウクライナ戦争
開戦一年目の期に突然、首都キウイを訪
れたことを書いたその後、案の定、日本
の首相が真似をした。「必勝しゃもじ」の
お土産を持つて。政治が見世物になって
いて久しいがここまでゆくと。多くの
犠牲者はどのように感じているのだろう。
野球WBCの報道や娯楽。パフォーマンス
はそれらをかき消すように大々的かつ無
内容になってきている。もはや人間は悲
劇を喜劇で通してでしか見ていられなく
なっているのか。

そして、その悲劇に正面から向かい合
つてきた日本の知性が次々に亡くなって
いく。大江健三郎、坂本龍一氏が相次い
で没した。戦後の反省を自省からはじめ
た文化人たちである。当たり前のことで
あるが誰も行ってこなかった。やはり体
験からくるものであろうか。残された
我々にはその体験がない。しかし、彼ら
は「想像力」の大切さを残してくれた。
いかに思いを巡らすか。それは決してシ
ョーやパフォーマンスからは得られない。
さて、先月3月11日は2011年の
東日本大震災の発生した日。本年2月に
はトルコ・シリアでM7.8の大地震が
発生している。そして南海トラフ地震は

確実に発生すると予想されている。世界
中には危機が至る所にあり、そして不幸
が生まれている。新型コロナは依然とし
て収まっていないし、人類は昔からずつ
と疫病に悩まされてきている。地震や疫
病は自然災害であるが、人間自身が作り
出した地球環境破壊による災害もある。
最大の自然破壊であると同時に人間破壊
が「戦争」である。このように人間は誕
生以来ずっと苦しみ続けている。では、
なぜこのような「苦」がなくならない世
界に人間は生まれ続けるのだろうか。今
月はこの「生まれてくること」を哲学し
てみよう。

(1) 反出生主義とは

冒頭に書いたように、現在の理不尽で
過酷な世界、あまりにも苦勞が多い人生、
「ああ、私は生まれてこなかったほうが
良かった。」という人も多いだろう。そし
て、思い余つて自死を選ぶ人もいる。現
に自殺者数は増加の傾向にある。そして、
そのような人生が待っているのだったら
「私は子供を産まないほうがいい」とい
う考えも生まれる。これに答えるように
「出生率」は近年顕著に減少化の傾向が
みられる。これらはどちらも「反出生主
義」と考えられがちであるがそれらは哲
学的な意味の「反出生主義」と区別する
必要がある。

【反出生主義の定義】

『反出生主義とは、「すべての人間ある

いはすべての感覚ある存在は生まれるべ
きではない」という思想。』

反出生主義は「すべての人間」や「す
べての感覚ある存在者」について「存在
と非存在」を語る哲学的思想である。た
んに「私は生まれないほうが良かった」
(「誕生否定」とか、「私は子どもを産ま
ない」(「出産否定」という個人的考えに
とどまっているものは、反出生主義とは
呼ばない。同時に「感覚ある存在」とは
「苦痛」を感じることでできるという意
味であり、この意味から多大な苦痛をも
たらす「自死」はこの主義からは主張さ
れない。すでに存在しているものを途中
で切断する思想ではない。「出生は普遍的
に悪い」、つまり人間存在自体が「悪」な
のである。その分岐が「苦と快」の不均
衡にあることを分析哲学、つまり言語哲
学を応用して論理づけをしているのがこ
の思想の特徴である。南アフリカの哲学
者D・ベネターが2017年『生まれて
こないほうが良かった』が日本で刊行さ
れてから注目されている。

(2) 「快苦の非対称」

ある人が生まれてきてこの世に存在す
る場合(「存在」)には、必ず何らかの苦
痛と快楽が存在する。逆に、その人が生
まれてきていない場合(「非存在」)には、
その人自体が存在しないのだから、苦痛
も快楽も存在し得ない。その二つの状況
を比較したときに、前者のほうが「悪い」

というのがベネターの主張である。「苦痛が存在する」ことは確実に悪いことだけれど、「快樂が存在しない」というのは、悪いこととまでは言い切れない。ここで「非存在」が優位に立つ。その「快苦の非対称性」ゆえに、生まれてきて「苦痛も快樂も存在する」よりも、そもそも生まれてこずに「苦痛も快樂も存在しない」ほうが絶対に善いのでという理屈である。

「非存在」が「存在」よりも優れているのであるから、人間は「非存在」を選ぶべきという主張である。ただし、現在、存在している存在者を急速に消滅させるのは「苦」を伴うから暫時的消滅に向かうのがいいと彼は言っている。

この哲学的理論「非対称性」は難解であるが、感覺的にはわかるような気がする。それは「苦」というものは簡単に体験できる一方、快を得るのはそう容易いものではないからである。「苦」は針の刺しもあれば簡単に得られるが、「快」はそう簡単には得られない。

(3) 歴史上の「反出生主義」

紀元前、古代ギリシアのソポクレスらは「いちばん良いのは生まれてこないこと、次に良いのは来たところに早く戻ること」という思想を詩や戯曲で語っている。これは人間が生まれることの否定である。彼らは人間が生まれることと生まれないことを比較し、生まれないほうがより良いと結論した。人間の歴史は「誕

生否定」から始まっているのである。その後のユダヤ・キリスト教においても、幸福のみが存在する天国のアダムとエヴァは苦しみの罰を与えられエデンの園を追放されこの世に生まれている。その子孫が私たちということになっている。

一方、東方の古代インドでは人間が死後に再び生まれることの否定「輪廻否定」で始まる。古代インド人は、死後に人間の我（アートマン）は他の有感生物へと輪廻し、この輪廻は果てしなく続くと考えた。これは苦しみのある生が果てしなく続くことを意味する。それを避けるために、原始仏教の修行者たちは修行によって涅槃に至ろうとした。人間世界で涅槃の状態に達したとき、人間の輪廻は停止し、その人間はいかなる世界へも再び生まれることはない。

(4) 近代のペシミズム

近代はデカルト以後合理主義の時代になる。この時代は感性、感覚より人間の理性が優位に立つ。感性的「苦」は理性的「快」によって克服されると考えられた。しかし、長期にわたる宗教戦争や自然災害に見舞われ再び「この世界は悪と悲惨に満ちたものだ」という人生観、世界観は近代になっても蘇る。そのような不合理、不条理な世界をショーペンハウアーは「世界は盲目的な意志によって動かされている」と考え、悲観主義思想を哲学した、これがペシミズムである。彼

は世界を表象とみなして、その根底にはたらく「盲目的な生存意志」を説いた。この意志のゆえに経験的な事象はすべて非合理でありこの世界は最悪、人間生活において意志は絶えず他の意志によって阻まれ、生は同時に苦を意味し、この苦を免れるには意志の諦観・絶滅以外にならぬという。この厭世観的思想は、19世紀後半にドイツに流行し、ニーチェを介して非合理主義の源流となった。しかし、ニーチェの思想「力への意志」はショーペンハウアーとは逆に楽観主義である。だが、不条理という共通性は残されている。

(5) 現代

「ロングフル・ライフ訴訟」を聞いたことがあるだろうか。これは、「なぜ私を産んだ」と生まれた子がその親や医師を訴えるものである。この苦に満ちた世界に本人の同意なしに「生まれさせた」負の責任を問う裁判である。驚くべき現象であるが1960年代にすでにアメリカで起こされている。

また、菜食主義で知られるビーガンは、「苦痛を感じ得るあらゆるものの生成に反対する」としている。彼らは、すべての人間は子どもを持つべきではないし、すべての人間はビーガンにならうと目指すべきであると主張する。同時に、人間の手によって有感生物が産み出されることも否定するので、人間だけを対象とし

た反生殖主義よりも広い視野を持つと言える。このように現代の「反出生主義」は「出生否定」に向かっている。冒頭に書いたように現実には世界人口の減少は趨勢である。このように「反出生主義」はそのシナリオ通りに進んでいるのである。人類自滅の道を静かに、そして確実に。

さて、今月も暗いテーマが続いている。しかし、3月13日には新型コロナウイルス、対策ガイドラインの見直しが行われたり、海外からのインバウンド観光客の増加もみられる。そろそろ世間は明るくなるのだろうか。だが一方で、自然災害や戦争の方は一向にその終結の兆しが無い。やはり「苦」の世界は変わらないのか。もう余白は残されていないので、ここでこのコラムは書き止めである。今号の読者は暗い気分を紙面を閉じることになるが、最後に希望を残して終わる。それは、人間の「苦」こそが優位の条件であると考えられるのである。「単独」の人間はそこから「共感」「連帯」「共同」「改善」へと「進化」する。『人間は考える葦である』(パスカル)

むかし、店の客でよく話をした女性が意外な事を言われて感激したことがある。彼女は知的障害者の弟がいる。弟の面倒は彼女が小さい頃から毎日見ているので苦にもならないし、その生活が当たり前になっているから、特別考えたりはしない。今も弟の面倒を見続けている。

彼女を毎日のように見かける。たまに弟さんとみられる男性と一緒にの時もある。彼女は非常に明るく聡明で楽道家である。一番目を引くのは美人だという事である。親しくなってお茶でもしたいのだが、そういう隙は無く忙しそうに働いている。弟が障害を持っていたので社会福祉関係のNPOを立ち上げ頑張っているから大したもんだ。

彼女こそ、自分や弟の運命を切り開き他人までも助けようとしているが、彼女との会話からは、みじんもそんな気負いが感じられない。みんなが彼女のようになれるとは考えないが、障害者と生活することを普通なんだ特別な事ではないと考え楽しく生きていける人は少ないだろう。

彼女の持つ優しさや気配りと生活力に只々感嘆した。世の中には、身近に偉い人がいるもんだと改めて意識した。身近

なところに世界を少しでも住みよい社会にするヒントや頑張っている人が沢山いるんだろう。私が気づかないだけなのだ。

新型コロナウイルス禍愚考

(その31)

明石 幸次郎

コロナ感染禍の去年から再開した、大学クラブOB有志での万博記念公園での花見宴会を今年もと言うことになりました。いつも出席されている87歳?の大先輩のOさんのご自宅に電話したところ奥さんが出られて、明るい大きな声で「いつも連絡頂いて有難うございます。主人は和歌山の実家に一週間ほど行ってます。何か庭の柿の木に肥料をやり過ぎたので枯れたらダメなので、手入れすると行きましましたが、手入れするの、枯らすのか分かりませんわ。はっはっは」と言われ「一度、7、8年前に和歌山の豪邸に皆でお邪魔して、泊めて頂き、奥さんにもその節は、お世話になり色々とお話をお伺いしました」とお話して和歌山の電話番号を教えてくださいました。

直ぐに和歌山の方に連絡して要件をお伝えしたら「出席するわ。又、弁当と焼酎を持って行ったらエエねなあ」とこ

ろでいつまで居られるのですか?」とお聞きすると「来週の火曜日に帰るわ。庭の柿の手入れが大変なんや」と満更、大変さを楽しんでおられる様子で、「奥さんにお聞きしましたよ、大変ですね」と電話を終えました。今秋お孫さんを連れて来られ「これがおじいさんが手入れした木から採れた柿や! どうや美味いやろ! それと、和歌山の柿から作った“あんぼ柿”がこの世で一番美味いんや!」と言われている光景が目に見えませんでした。

そこで思い出したのが、今春中一になる女の子の孫がお祖母さん(娘の旦那のお母さん)が高野山で一人暮らしで、寂しそうにしているの、一人で遊びに行くと言うことを。娘夫婦は以前、孫の友達3人だけで電車に乗って行ったので、今回は一人で行く、本人も行くと言っているの心配だけど聞いていました。丁度、私も閑で久しぶりに高野山に行きたいと言う気になり、予定が合えば、Oさんに電話してお会いしてもと言う気持ちにもなり、娘に連絡したら「予定が無かったら一緒に行つて貰ったら、助かります。良かった」と言うことで大義名分が立ちましたので、愚妻にそれを話すと「孫が一人で行くと言うのにアンタが余計なことと違うの?! 私やつたら、一人で行くすけど! 電車に乗ったら行けるやんか! 本人も行けると言っていると聞いてるよ」と反対されたが「俺も行きたいし、娘も心配してたしなあ?」と言う

と「そう、行くのであれば、孫を連れて行つたらアカンよ! アンタが孫に連れて行って貰うようにしてね。先さきに指示したら駄目よ、何でもあの子は少しっかりしているようで、人に頼るところがあるから、あの子の為にならないからね!」と注文を付けられました。愚妻とは、孫に対する愛情の表現の仕方が違う所があり、この孫から「おばあちゃん、一人で家に居るので何もなかったら来てくれる」と両親が働いているので夕方に愚妻の携帯に電話が掛かって来たら、喜んで何か食べるものを持って車で出かけてます。本当にあの子はすぐに私に頼るからねと独り言のように言いながら、「娘が又、残業みたいやから行つてきます。遅くなるかも分からないので、何なら先に食べといてね」といそいそと、度々行きますが――。

本日、5日に一人で高野山から帰つてきてこの拙文を書いています。

8年程前にOさんの豪邸に泊めて頂いて翌日OB8人位で高野山に行きました。

直前に小学校の先生を退職して、高野山で代々の土産物屋を守っているお母さん(娘の義母)に電話したら「折角、皆さんが高野来られるんですしたら、是非、お茶でも飲みに寄ってくださいね。お待ちしていますよ」と言われたので、皆で車で高野山に行き、まず奥の院をお参りしてと歩き出しました。その途中でOさんが反対から降りて来た老夫妻に「Iよ!

おーう、何してるんや」と声を突然かけられた。皆が前の老夫婦を見ると神奈川県の居られる大先輩が驚いた様子で「Oさん、皆さん、こんな場所で会うなんて何と奇遇ですね！」とビックリされ

奥さんも驚かれた様子で、「これから皆さんは？」と聞かれたので、私はこの先輩に東京で単身赴任していた頃、赤坂のクラブによく連れて行って貰い、青山にある建築事務所にもよく遊びに行つて名前も覚えて頂いてましたので「昨日Oさんの高野山の麓にあるご実家に泊めて頂き、折角やから、高野山に行こうと言うことになりました。それで奥の院にお参りした後、娘の義母がやっている土産物に寄つてお茶を飲んでから昼めしでも食べに行く予定です。ご一緒しませんか？」とお誘いしたら「おう、明石君、元氣そやな！有難う、久しぶりに皆さんとお話したいけど、どうしても今日、東京まで帰らなくなつてね」と一見怖そうな元山男の顔がニコニコとされ、「又、皆さんとお会いしたいね。O先輩もお元氣そうでお会いしたいね」と言われるとOさんが「ハハハ、阪神支部の後輩連中がよく遊んでくれて、有難いわ」と言つて別れた。そのI先輩は現在は歩けなくなつて居られるようです。高野山の8年前の思い出が浮かんで来たので、孫に連れられて奥の院とこの孫のおじいさんのお墓を案内してもらいながらこの話をしましたら、「ふーん、面白いね」と笑われました。

この8年、コロナの期間3年含め、私も先輩方も亡くなる方もおられるが、人との出会い、繋がり、思い出を大事にすることが生きて行く力になると、孫に連れられて高野山詣で改めて思った次第です。

オクラの山たより (79)

困了生

—

店賃(たちん 借家の家賃のこと)二百文今の四千円ほど)の裏店に住んでいた一茶の隣家にはさまざまな人が住んでいました。そうした人々は、籠に入れた品物を天秤棒にぶら下げて早朝から夕方まで街を売り歩く棒手振(ぼてふり)、雪の中でも夜泣きそばを売る人など、いずれも「すべてわが精力を練り、骨折りにて世を渡る」人々でした。たとえば野菜を終日売っていた棒手振はどれほどの値段で野菜を売っていたのか推察できる句が一茶にあります。

- ・小松菜の一文束やけさの霜
- ・二文菜にかさいの露のまだひぬぞ

小松菜一束が一文(今の二十円くらい)ではいったいどれだけ売れば生活のたし

になったのか、心配になります。「かさい」は葛飾区の江戸川と中川に挟まれた地域で帝釈天で有名な葛飾柴又あたりの地名。一茶の住んでいた本所・深川よりもさらに田舎で野菜の生産地でした。「露のまだひぬぞ」、つまり露がまだ乾いていないのですから朝早くに一茶の住む裏店のあたりに「菜はいかが」と売りに来たのでしょうか。

余談となりますが、当時の野菜の値段を記したついでに一茶の句から江戸の物価を少し紹介します。

- ・木枯しや一山三文さつまいも
- ・大江戸やただ四五文も薬食い
- ・上々のみかん一山五文かな
- ・酒五文つがせてまたぐ火鉢かな
- ・蓮咲くや八文茶漬け二八そば

一文が今の二十円に換算できると考えれば現在の物価高騰の折りうらやましいほどの値段です。「四五文」は「四文か五文」ということで「薬食い」は獣肉、主に鹿や猪の肉ですが、その肉を食べることで一茶の好物でした。「さすが江戸だ。たつた四、五文で薬食いができる」という句意ですが、それにしても四、五文とは安すぎます。貧乏な一茶のこと。たぶん売れ残りの肉を買って食べていたのではないのでしょうか。薬食いが過ぎてつい暴飲暴食したことを詠んだ「薬食いからはじまるや暴れ喰い」という句もあり

りますから相当に好きだったようです。そういえば「薬食い」の句は蕪村にも何句かありますから、蕪村もかなりの「薬食い」好きだったのでしょうか。「二八」は十六文のこと。お茶漬けが一六〇円でそばが三二〇円。お茶漬けが少し安いですが立ち喰いそばであれば現代でもそんなに違和感のない値段でしょう。

二

さて、一茶の住んでいた裏店には棒手振や夜泣きそばで生計を立てている人以外に別の職業の人たちもいました。雑芸人と呼ばれる大道芸人たちです。当時、日本最大の都市であった江戸はまさしくこうした雑芸人たちにとって最高の稼ぎ場所でした。一茶の時代に存在したさまざまな芸人のうちで常設の寄席などをもつてなんとかなりだしたのは、落語と講談くらいのもでした。そのほかの芸人たちは雨が降れば仕事ができなくなることは棒手振などの日雇稼(ひようかせぎ)その日の稼ぎ(一日単位の労働の稼ぎ)で毎日の生計を立てていること。日用(ひよう)または日雇ともいう)の仕事をしていた人々と変わりはありませんでした。そもそも近世の芸能は二つの流れがあり、一つは中世以来の能楽や歌謡を前提として、直接には富の生産に従事せず他者から施し・喜捨を乞う(勸進)ことから発達したと考えられています。勸進を

する、つまり他者からの施し・喜捨を受けるためにそうしたことをする人たちはさまざまな技芸を身につけることによつて自らの生活を支えました。富を生産する手段を持ち得なかつた人々が施しや喜捨を得るためおこなつた技芸は、芸能を娯楽的に享受し楽しむ人々が社会的に増加していき、施し・喜捨を乞うという本来の目的から見るとして見ることに、芸能が喜びの対象となつていきました。芸能の商品化です。近世の芸能者が「河原乞食」などと社会的に卑賤視された源泉にはこうした芸能の成立にまつわる話がありました。

このことについてもう少し話を続けますと、一六九〇（元禄三）年に出版された「人倫訓蒙図彙」という書物がありま

す。これは江戸時代のさまざまな職業や身分について開設が絵入りでなされた、いわば職業百科辞典です。この書で取り上げている職種は五百項目以上。当時のほぼすべて職種を網羅しているといつてよいでしょう。全体は七巻七冊で各々の身分や職業が七つの部に分けられていま

す。今、注目したいのはその第七巻にある「勸進餉（かんじんもち）」という部です。そこには四十四種の職業があげられています。寺院の梵鐘鑄造の喜捨を求め「鐘鑄勸進」や折れた針の供養をする「針供養」、鹿島社の託宣を告げるとい

う「事触（ことふれ）」などの下級宗教者を含んでいます。全体としては宗教者と

芸能者が一緒くたになっています。たとえば念仏やお経を独特の節をつけて唱える「門経読（かどぎょうよみ）・歌念仏」、鐘を打つたりして念仏を唱える「鉢叩き」、また曲芸である放下（ほうか）と獅子舞を合体させた伊勢大神楽（代神楽）（いから）ともいう）は伊勢の神札を配つて行うように芸能も色濃く宗教性をおびています。さらには祇園社や賀茂社の境内で軍記物の「太平記」をよんで物もらいをする「太平記読み」、大道で相手なしに能楽をした「謡」といったものもありますが、それらが大道芸や門付け芸としてなされたという共通点から、勸進・物もらいとして一つの部にまとめられたのでしよう。

興味深いのはこの「勸進餉部」には次のような前文があります。

それ勸進とは、在家（さいけ）の男女に上なき仏法を説き聞かせ、または無上迅速の理（ことわり）をしめし、無明の夢を覚ますすすめをなし、これによつて法施を受くるを勸進といふなり。しかるを、いまどきの勸進は己（おのれ）が身すぎの一種にして、人をたぶらかし、偽（いつわり）をいひて施をとる。これままたく盗にひとしき也。名づけて唱門師（しょうもんじ）といふ也。

宗教的な役割があり、それに対して布施を受ける「勸進」だったが、近世ではそういった宗教性は消えて、たんなる「己が身すぎ」（＝食を求める手だて）としての「物もらい」となった。しかも「たぶらかし」「偽をいひて施をとる」「まったく盗にひとしき」行為となっているではないかと強烈に批判しています。もちろんこれは「人倫訓蒙図彙」の著者が京あたりの都会知識人であり、その目から見た芸人観であり、上から目線的な表現が鼻につくのは致し方ないことでしょう。しかし、江戸時代前期に芸能がどういう経過で生まれ、人々にどう見られていたかを示す好史料ではありません。

少々話が脇にそれました。いそいで話を元にもどしますと、近世に芸能が生まれるもう一つの流れは商人の販売技術、あるいは宣伝行動の一部が芸能へと展開していった形態です。商品を売るために客を呼び集める手段としての芸能が自立化する傾向です。たとえば、「フーテンの寅」こと車寅次郎が「粋な姉ちゃん立ち小便」とおもしろおかしい話をして客を集めて品物売っていく芸がこれにあたります。「ガマの油売り」「飴売り」などもそれにあたるといふでしょう。

世路山川より峻（げむ）し
木がらしや地びたに暮るる
辻諷（うたひ）

武士といえども禄を離れば何の富も生産し得ない無産者です。習い覚えた謡いの芸で身を立てるほかはなかつたのです。「世路山川より峻し」とは当時のことわざであつた「人心は山川よりもけわし」から来た言葉です。身分もお金もない身には世間を吹く風は冬の風よりもいっそう冷たかつたことでしょう。貧しい生活をしていることでは一茶も同じ。風の音に負けまいと声をふりしぼつてうたいつづけて銭を乞う浪人の姿に一茶の心は動いたのでしょうか。

たぶん、この「辻諷ひ」は街の中で見かけたものであつたでしょうが、他にも次のような句があります。

・三絃で親やしなふや花の陰
・木枯らしや棧橋（さんぼし）を

這（は）ふ琵琶法師

街の辻で三味線をひいてわずかな銭を得て親を含めた一家の生活の資を稼ぐ娘。

寒い風の吹く中、棧橋で川に落ちては大変と這いながら移動していく目の見えぬ

琵琶法師。これらの姿にも一茶の心は強く動いたことでしょう。

さまざま雑芸人の姿を詠んでいる一茶ですが、中でも彼が気になってしかたのなかった雑芸人たちがいました。それは「節季候(せきせう)」です。

「節季候」という職業を耳にした方はほとんどいないと思いますが、十一月下旬以降、間近に迫った新年の祝言を述べて歩く門付けの大道芸の人々のことです。「茜木綿の手甲脚絆を穿ち、麻裏草履の鼻緒赤く、同じく赤色木綿の細紐でこれを結び、蘭草の葎山形の笠(イグサで作った円錐形の笠)をかぶり、茜木綿で面部を包み」目ばかりを出すという目立つ姿をしてにぎやかに歌う唄の文句は「サツサ節季候、毎年毎年、旦那のお蔵へ金銀お宝飛び込め舞い込め」とめでたいもの。この唄を歌いながら、三、四人連れだって、女の三味線にあわせて、四ツ竹(カステネットに似ていて両手に竹札を二枚ずつ握って打ち合わせる楽器)、太鼓、拍子木などの伴奏のもと「来る年の福と、また年の終わりまで何事なく送り重ねしを祝ふ心」という内容の祝詞をせわしく唱えて、米銭を乞うて市中を歩きまわった大道芸の人たちが「節季候」です。歳末の風物詩ともなっていたことから「節季候」は俳諧では冬の季語とされてきました。

「節季候」は松尾芭蕉が生きていた時代に出版された「人倫訓蒙図彙」の「勸

進訓部」にもすでにその言葉が見え、芭蕉に次の句があります。

・節季候の来れば風雅も師走かな
・節季候を雀のわらふ出(で)立ちかな

しかし、芭蕉とは違って一茶は「節季候」を風雅なものとは見えず、彼らもまた冬の寒風よりもおつらい世間を生き抜いていく貧しい人々だとして心に大きく響くものがあつたようで、一茶は故郷に帰ってから彼らの姿態をくり返し詠んでおり、その数は六十句にもなります。その中から何句かを紹介してみます。

- ① 節季候や七尺去つて小節季候
- ② 三絃は妻にひかせて節季候
- ③ 節季候を女もすなりそれも御代
- ④ 町中をよい年をして節季候
- ⑤ さてもさても六十顔の節季候
- ⑥ 馬の尻の真風下や節季候
- ⑦ 傾城が可愛いがりけり小節季候

①と②の句。節季候の中には妻や子どもづれがいました。①は節季候がやってくるとその二メートルばかり後に子ども節季候がついてきている、という句意です。慣れない物乞いに戸惑いながらも無邪気に親に従い物乞いをする子どもは胸をうちます。③の句は文化十年の作。この頃、江戸には女性の節季候が多いたのだらうと推測できます。④と⑤とは

年老いた節季候の姿が詠まれています。老年となつても声を張り上げて稼がなくはならぬ老いたる節季候の姿は物価が高騰する現代社会の中で生活がいちだんと苦しくなっている老人のありようと重なります。⑥の句の節季候は悲惨です。木枯らしの風下で馬の尻を真つ向から浴びる姿を想像するとなんともやるせない思いがします。芭蕉のいう「風雅」とは程遠い世界です。⑦の句で「傾城」は遊女のこと。遊郭の遊女が節季候の子どもを憐れんでかわいがつたのでしょうか。考えれば遊女の境遇も悲惨なものでした。

四

こうした棒手振や節季候のような日雇い稼ぎの江戸庶民にとつて最大の気がかりは病氣と飢餓でした。疱瘡(天然痘)や麻疹(はしか)はつねに人々をおびえさせていました。幕末には「狐狼狸(コロリ)」と呼ばれたコレラが大流行して江戸の市民の約三万人の命を奪つたことは有名です。

病氣以上に恐怖であつたのは飢えです。「奥筋に事あらば(東北地方に飢饉があれば)、仙台の米は入るまじ。西国の方に事あらば、上方の米は入るまじ。その時は御城下の民、食に飢えて騒ぎ立たん」(荻生徂徠「政談」)といった具合で江戸の米事情はなにと不安定であ

り、米価はすぐに乱高下しました。麦、粟、稗などの雑穀があつた地方とは違い江戸には米以外に穀物はありません。上がった米価を下げようとすれば騒ぎを起こして下げる以外に方法はありませんでした。事実、天明の飢饉に際して江戸に住む民衆、特に民衆世界を構成する基盤であつた裏店に住んでいた下層の人々によって大規模な打ちこわしが起こっています。

しかし、こうした不安定な江戸から裏店に住む人々は江戸から出ていくことはしませんでした。もちろん、それはなんだかんだといつても公方様のいる江戸にはいろんな面で豊かさということがあつたのです。この江戸で生活する人々の気分を次のように一茶は詠んでいます。

- ・大江戸や芸なし猿も花の春
- ・砂糖水ただふるまふや江戸の町
- ・うら店も江戸はエドなり雑糺
- ・大江戸や犬もありつく初鰹

そして「俳風柳多留」に「五番目は同じ作でも江戸産(うま)れ」という川柳があるように田舎から出て来た夫婦に五番目の子が生まれる頃には「江戸産れ」であることを誇りだして、「おいら江戸っ子だい」と声高に啖呵を切るようになるのでした。

隠された歴史(54)

満田 正賢

前回まで、伊勢神宮がいつ近畿王朝の聖地になったかを考察し。又、日本書紀の伊勢神宮以外の聖地の記述を考察しました。

日本書紀には伊勢神宮を近畿王朝の聖地にしようとする作が見られますが、それを除いて眺めると、出雲大神宮と石上神宮が、崇神、垂仁紀より神宝を貯えている神宮として登場していること、宗像神と住吉神が近畿王朝の歴史に取り込まれていること、持統紀には、伊勢、紀伊、大和、住吉という近畿の聖地が重視されていること、吉野、対馬、出雲、信濃、土佐、という各地方の聖地が取上げられているにも拘わらず、九州、関東の主要な大社が、宗像大社を除けば日本書紀に登場していないこと、天武紀、持統紀では、天武、持統が頻りに参拝したのは龍田社(*風神)、廣瀬社(*水神)であり、風水害という現実的な問題を重視していたように受け取れること、熱田神宮は、日本書紀においては、神を祭る場所「聖地」としては紹介されていないこと、などがわかりました。

今回は、この日本書紀の聖地の記述とがらりと変わる続日本紀の「聖地」の記述を取上げます。続日本紀は神武から持

統までを記した日本書紀に続く史書で、

文武、元明、元正、聖武、孝謙、廢帝・淳仁、称徳(孝謙の重祚)・光仁・桓武の代を記しています。続日本紀の前半、文武、元明、元正、聖武の段の特徴としては、文武の祖母であり前天皇であった持統も、文武の母であり文武の後に即位した元明も、文武の姉である元正も、いずれも生前に次の天皇に譲位していることです。聖武自身も天平勝宝元年(七四九)、八幡大神の東大寺大仏参拝の直前に娘の孝謙天皇に譲位しています。

文武―聖武期の「聖地」の記事の特徴は、第一に、伊勢神宮の記述が頻りに見られ、齋宮が継続的に派遣され「多氣太神宮(*御船神社)を度会郡(*伊勢神宮のある地域)に遷した。」(文武二年・六九八)、「幣帛(みてぐら)を伊勢太神宮に奉るには、五位以上の者が亀卜によりえらばれた者をあて、六位以下の者をあてては成らない」(聖武・天平二年・七三〇)の記事に見られるように伊勢神宮の権威を徐々に高めていることです。第二に、各地の神社が「伊勢太神宮及び諸社」という形で伊勢神宮の下に置かれるようになったことです。第三に、雨乞いの記事が頻りに記されていますが、「幣帛を諸社に奉納して名山、大川に雨乞いした」(文武・大宝元年・七〇一)のように、雨乞いを国家的に取り扱うのではなく、

地方に任せていることです。

その他注目する記事としては文武・大宝二年(七〇二)に「賀茂祭」が取上げられており、聖武・天平十七年(七四五)には「京畿内の諸寺および諸々の名高い山の清らかな場所において薬師悔過の法会を行なわせ、賀茂、松尾などの神社に祈禱をさせ、諸国で所有している鷹、鶴をとものに放たしめた」という記事があります。天平十七年(七四五)は聖武が恭仁京・平城京・難波京を行き来している時代です。そして大宝二年(七〇二)は都がまだ藤原京にある時代です。現在の京都にある大社は、都が平安京に遷都されるはるか昔から既に重要な存在感を示していたことがわかります。

日本書紀と続日本紀の大きな違いは、地方にある大社が続日本紀では全く記されていないことにあります。これは仏教の影響力が強まり、大寺の記事が頻出してきていることの裏返し傾向であると思われる。さてここからは、続日本紀の中で特出している「聖地」としての宇佐八幡宮の記述を紹介します。続日本紀が宇佐八幡宮を国家的な特別な聖地として取上げている記述は次のようなものです。

年(七八七)に、新羅をどう扱うか神託を受けるために、使いを伊勢神宮、大神社、筑紫住吉、八幡二社、香椎宮に使わした、という記事で初めて登場します。ここに出てくる筑紫住吉、八幡二社、香椎宮は日本書紀に記されていない聖地ですが、持統期以前に存在していなかったとは思えません。仮に朝鮮半島に近い九州の聖地をあえて取上げたとするならば、日本書紀に頻りに出てくる宗像神を取上げて然るべきです。なお、「筑紫住吉、八幡二社」という文面については、「筑紫の住吉・八幡二社」という解釈と、「筑紫住吉と八幡二社」という解釈の二通りの解釈があります。「筑紫住吉と八幡二社」とした場合、天平九年(七三七)時点では八幡神を祭る管崎宮はまだ創建されていませんので、「八幡二社」とは宇佐八幡宮の八幡大神と比咩大神の二社という解釈になります。

そして、宇佐八幡宮が国家的な特別な聖地として始めて記されたのが、東大寺大仏造立に際して、その成功を託宣して入京し、東大寺の鎮守社として迎えられたという記事です。具体的には天平勝寶元年(七四九)、東大寺大仏建造時に宇佐八幡宮の禰宜が天皇の乗る紫の輿に乗って大仏を拝したと記されています。この記事については、いくつか一連の前段階の記述があります。最初に、天平十七年(七四五)に「播磨守、正五位上の阿部朝臣虫麻呂に命じて幣帛を宇佐八幡

神社に奉らせた」という記事が現れません。使者が正五位上ですから、この時点ですでに宇佐八幡宮は伊勢神宮と同等の扱いを受けていることとなります。そして天平二十年（七四八）には「八幡大神の祝部で従八位上の大神宅女、従八位上の大神杜女にそれぞれ外従五位下を授けた」、天平勝宝元年（七四九）には「八幡大神の禰宜、外従五位下の大神杜女、従八位下の大神田麻呂の二人に大神朝臣の氏姓を賜わった」という記事があり、天平勝宝元年十二月二十七日の「八幡大神の禰宜尼大朝臣杜女へ分註…その輿は紫色で、天皇の乗り物と同じである」が東大寺に参拝した。（中略）その上で、大神に一品、比咩神に二品を奉った」という記事に続きます。

さらに、宇佐八幡宮が国家的な特別な聖地であることを証明する最も顕著な事件が、神護景雲三年（七八九）のいわゆる「宇佐八幡宮神託事件」です。この事件は、大宰主神習宜阿曾麻呂（だいたいのかむつかさすげのあそまろ）が八幡大神の「道鏡が皇位に就くべし」という神託を奏上し、弓削道鏡が天皇位を得ようとしたが、称徳天皇の命を受けて宇佐八幡宮に赴いた和氣清麻呂が、「臣をもって君とすることは未だ有らず」という託宣を得てこれを阻止した、という事件です。

宇佐八幡宮は単なる一地方の聖地ではなく、国家全体に影響を持つ聖地として取り扱われています。それにも拘わらず、筑紫住吉と香椎宮という博多湾岸の重要な聖地と共に続日本紀に初めて記されています。つまり、国家全体に影響を持つ聖地が日本書紀に秘匿されていたと考えざるを得ません。その理由としては、宇佐八幡宮が前王朝たる九州王朝の聖地であった可能性が極めて高いと考えます。

なぜ、宇佐八幡宮が九州王朝の聖地となったのか。それは祭神たる八幡神が継体五世祖とされる応神天皇の化身であることを抜きには考えられません。又、「八幡宇佐御託宣集」には「善記元年の記に云く、大帯姫大唐より日本に渡る後、（中略）、「第二十九代安閑天皇元年なり、一に云く、彦山権見衆生を利せんが為、教に四年甲寅摩訶陀国より如意宝珠を持ち日本国に渡り、当山般若石屋今玉屋と号すに納められる。」「一。善記元年壬寅、大唐より八幡大菩薩、私に云く、香椎の御事なり（中略）」など「善記」「教到」という九州年号で記された記事があります。「八幡宇佐御託宣集」自体は正和二年（一一三二）に宇佐弥勒寺学頭僧神作（しんうん）が編纂した縁起書ではありませんが、九州年号が記された元史料があったと考えざるを得ません。特に最初の九州年号である「善記」が記されていることに注目すべきです。

近畿王朝にとって前王朝の聖地と推測

される宇佐八幡宮の存在、祭神たる八幡神が継体五世祖とされる応神天皇の化身であること、そして「八幡宇佐御託宣集」の中にある、最初の九州年号「善記」を含む九州年号で描かれた縁起は、「継体、安閑、宣化と続いたあと宣化の嫡子が那津官家にはいり後期九州王朝を立ち上げた」という私の仮説によって説明がつきます。

なぜ聖武天皇は宇佐八幡宮を「国家全体に影響を持つ聖地」に格上げしたので

しょうか。聖武の天平年間には、疫病、飢饉、旱魃、地震など多くの天災に見舞われます。聖武はそれから逃れるために東大寺大仏建造を決意します。同時に聖武は、天災をもたらした原因として、養老四年（七二〇）の隼人（前王朝・後期九州王朝の残存勢力）の征伐によって滅ぼされた前王朝の崇りを恐れたのではないのでしょうか。

一連の経緯については「隠された歴史（17）、（18）」で紹介していますが、宇佐八幡宮は、前王朝の聖地でありながら、隼人（前王朝・後期九州王朝の残存勢力）征伐の先頭に立ちました。そして隼人征伐後、滅ぼされた隼人の御霊を祀り、放生会を行なっています。まさに聖武が恐れた前王朝の崇りの根源となっていた場所でした。その為に聖武は、前王朝の御霊を祀る宇佐八幡宮を「国家全体に影響を持つ神社」に格上げし、伊勢神

宮と並ぶ「聖地」化を図ったのではないかと想像出来ます。

「道をゆく」三八 伊勢

「女芭蕉の心意気

桑原久子の旅日記から」(六)

成瀬和之

「伊勢に行きたい伊勢路が見たいせめて一生に一度でも」と道中伊勢音頭に歌われたように、江戸中期以降人々は旅行を楽しむようになります。そして伊勢参りは一八世紀後半に全盛期を迎え、最盛期の「おかげ参り」には約四八〇万人の参詣者があったと言われています。人口の六人に一人に当たります。そのほとんどが農民です。

江戸時代には米を作らずに村から出るのは御法度でした。江戸幕府は関所を設け、人々の移動を制限しています。しかし、「抜け道」がありました。それは神社仏閣への巡礼の旅でした。年貢を多く納めるための「五穀豊穣祈願」の旅であれば、幕府は農民の移動を大目にみましました。この巡礼の旅の一番人気が「お伊勢参り」だったのです。

この一大旅行ブームの裏には、仕掛け人、御師（おし）と呼ばれる神社仏閣の下級神官（現代風に言うとな営業マン）の存

在がありました。伊勢神宮では御師（おんし）と呼ばれていました。最盛期にはその数二〇〇〇人にも及びました。江戸中期には全人口の七割以上四五八万世帯が伊勢神宮をめざす「伊勢講」に入り資金を積み立てていました。

年末になると御師は各家々を訪問し、これを毎年の年中行事にしました。そしてお札（ふだ）とともに伊勢暦（いせよみやを配りました。伊勢暦は今でいうカレンダーです。そこには「田植えよし」「種まきよし」など農民にとって大変役に立つ情報が載っていました。作物を植えるタイミングが書かれていたのです。これによって伊勢暦は大人気になります。発行部数は二〇〇万部以上にもなりました。

カレンダーで「あ、田植えた、お伊勢さん」「あ、稲刈りだ、お伊勢さん」と日常から伊勢詣に気持ちに向いていくのです。このようにして御師は伊勢暦で農民たちの心をつかりつかんだのです。

御師は交通の不便なところまで、全国津々浦々入り込みました。実は、「一番の旅人」は御師だったのです。だから、旅の楽しさ、情報を伝えることができたのです。

江戸からのお伊勢参りの費用は、約九〇日の旅費が六両（六〇万円）そして大神楽（おおかぐら）の見物などの滞在費が二〇万円、合計八両（八〇万円）かかりました。農民一人の年収に相当します。多くの農民が決して豊かではなかった

時代、どうやって旅行の資金を作ったのでしょうか？御師は旅の資金の作り方も指南しました。村の中で伊勢参りをしたい人を集めて「伊勢講」というグループを結成します。「いくら貧しくても一日一文を積み立てていきましよう」と話を始めます。「一年経てばこれだけになります。そうすると何人が伊勢まで旅行できるかわかります。一度に全員が伊勢に行けない時は、くじ引きや話し合いで決めます。一度行つた人は次の機会には候補から外し、なるべく平等に全員が行けるようにしましょう。」という具合です。旅費をつくれないう時はどうやってお金を作るか。伊勢講田という共同で田をつくることまで指南します。

このように、日々の労働が楽しい伊勢参りへの道とつながり、人生の喜びが増えるイメージを御師は伝えたのです。そして実際に伊勢参りをし、楽しい思いをした人が広告媒体となって、口コミでまた広がることになったのです。

江戸時代には伊勢神宮の捉え方も現在とは違っており、太陽神（天照大神、内宮）と食物神（豊受大神、外宮）の組み合わせから、大部分の農民たちは「皇祖神」としてではなく、農業の神ととらえていたようです。そこで農閑期に、一年の収穫に感謝し次の収穫を祈願するというような意味での伊勢参りが根付いていたのです。いずれにしてもこれらは農村の共同体に基礎を置くものでした。

江戸時代の伊勢参りには大きく分けて三つのパターンがあります。一つは、今の様子を紹介した「講参り」で、計画的かつ組織的に参宮を企画するものです。これとは異なり、突発的に家を抜け出していくものに「抜け参り」があります。江戸時代の旅は本来、家の主や奉公先の許しを得たうえ、庄屋や町年寄などから「道中手形」の受給を受けてするものでした。このプロセスを抜きに、ある日突然いなくなつたと思つたら、数週間後に伊勢の神札をもつて帰ってきたなどというものがこれに当たります。抜け参りの時は、必ず柄杓（ひしゃく）を手にして伊勢に向かうとよいと教えられました。当時は柄杓を見せるとお伊勢参りと認められて、関所が通過でき、街道では飯や水を無料で施してもらえました。柄杓は「通行手形」の代役になったのです。

こうした「抜け参り」は、農村からだけでなく、都市からも多くの抜け参りがありました。幕藩体制がきしみ始めた天保の頃の、桑原久子さんの女旅もこの延長線上にありましたが、伊勢をはるかに超えて、善光寺、日光へ向かったところが「女芭蕉の心意気」です。

この「抜け参り」の大規模なものが、ほぼ六〇年を周期として全国的に起こった「おかげ参り」です。「おかげ参り」では、参宮者の多くが着の身着のまま、路銀も持たずに家を出ましたが、沿道の村々で食事・風呂・宿などを施すことも

多く（施行）、旅を続けることができた。

食物神（豊受大神）を祀る外宮で桑原久子さんは、昔伊勢詣をした時のことなどを思い出し、涙をこぼします。そして歌を詠みます。

まき柱ふとしきたてしにしえも
いまもかはらぬ伊勢の神宮 久子

外宮から内宮へ向かう両宮の間は五〇丁（約五・五キロメートル）です。その間に古市（ふるいち）という遊郭がありました。江戸の吉原・京の島原と並ぶ三大遊郭の一つとされ、全盛期には妓楼七〇軒・遊女一〇〇〇人を数えました。その遊女を見て久子さんは詠みます。

ゆうぐればよるべもなみのうかれ
めが をちこちびとのころもひくらむ 久子

（夕暮れが迫るころに伊勢湾による波のように遊女があらこちらの殿の衣を引いていることよ）

太陽神（天照大神）を祀る内宮でも詠みます。

伊勢じまや（縞木綿か）天照神のめぐみにてゆたかに杉のむらだちのおく（杉が奥まで群がり立っている）久子

みなさんも、外宮から内宮までの伊勢本街道の最後になる伊勢古市参宮街道だけでも歩いてみてはいかがでしょう。

次に、伊勢参りの歴史の変遷を見ていきます。

伊勢神宮は、もともと皇室の氏神であり皇居で天皇自身が祭事を行い、時代が下がっても庶民は拝むことすら許されませんでした。平安・鎌倉時代以後、こうした規制は徐々に緩められ、室町中期以後は庶民の参宮が盛んになってきました。江戸時代には、人々が一生に一度だけでも伊勢に行きたいと願うようになったことは既にみたとおりです。

江戸時代には、一七〇五年や一七七一年など数度の「おかげ参り」が起りましたが、特に一八三〇年の「おかげ参り」は最大規模のものでした。幕藩体制の矛盾が激化してきて、その変革に向かう庶民のエネルギが、そのような形で発現したのでしょう。幕末期には伊勢神宮は幕藩体制に対する、一種の「反体制」のシンボルとなった時期があったのです。

明治になって、「万世一系の天皇」(「大日本帝国憲法」)が統治する「神権天皇制」の時代となり、その伊勢神宮は「体制」の頂点に立ってしまい、政府が参宮を奨励するようになったのです。そして神仏分離令が出され、廃仏毀釈が行われた時期もありました。

しかし、平安時代から一〇〇〇年の長

きにわたって紆余曲折がありますが、神仏習合の歴史が存在したことを忘れてなりません。

奈良時代の七十六年、称徳(しょうとく)天皇により建立された大神宮寺相鹿瀬(おうかせ)寺跡が伊勢神宮の南西にあたる多気町の熊野街道(伊勢路)沿いにあります。七堂伽藍の華麗な寺院だったと伝えられています。神仏習合の時代には、神社には神宮寺というものが作られ、伊勢にも大神宮寺があったのです。

伊勢神宮の北東には朝熊(あさま)山があり、そこには金剛證寺(こんごうしょうじ)というお寺があります。このお寺には、神仏習合の思想の神様、雨宝(うほう)童子像を祀る雨宝堂が建っています。この神様は、大日如来の化身である天照大神が日向国(宮崎県)に降り立った一六才の御影を弘法大師(空海)が感得して刻まれたと言い伝えられ、国の需要文化財であるという説明板が立てられています。今は臨済宗に改宗していますが、元は空海の真言宗のお寺だったのです。

「お伊勢参らば朝熊をかけよ 朝熊かけねば片参り」と書かれた看板が伊勢古市参宮街道や朝熊山へ登る伊勢志摩スカイラインの途中の道沿いに立っています。その朝熊山で芭蕉句碑をみつけました。

「神垣や思ひもかけず涅槃像」

はせを

(神域内で釈迦の涅槃像を拝むことができたが、全く思いがけないことであった)

当時神仏習合の名残りがあり外宮の神域内で見られたのでしよう。

神仏習合では、本地垂迹説(ほんちすいじやくせつ)というのがあります。神道の神様は、仏教の仏様が、姿を変えて日本に現れたものだと考えるのです。伊勢神宮では、大日如来が本地仏で天照大神が仮の姿をとって現れたというのです。空海の真言宗がかなり強く影響していたことが分かります。明治時代になって神仏分離、廃仏毀釈で、こういう神仏習合の考え方も全部否定されたのです。平田篤胤(ひらたあつね)(一七七六～一八四三年)の復古神道が、その思想的根拠となりました。

本居宣長の古道説を受け継ぎつつ、平田篤胤は、在来の神道の教説に混在していた仏教や儒教の教説を排除し、古代の神道と見なされるありようにかえすべきである、と主張したのです。この思想が後の尊王攘夷論に影響を及ぼしました。

さて、明治になって近代交通が発達するにしたがって昔ながらの歩き旅はすたれ、鉄道などを利用したものに変わっていきます。明治後半に伊勢への鉄道網が整備されると、徒歩による参宮は減っていきます。大正ごろを最後にほとんど消滅します。このため、伊勢参り客の通過で賑

わった街道沿いの旅籠や茶屋なども次々と廃業しました。鉄道や自動車の通る新道が開通すると、それから取り残された旧街道は、存在自体が忘れ去られるような状態になりました。

このように、伊勢神宮そして「お伊勢参り」は歴史の変遷を遂げ、神仏分離が強調される時代もありましたが、一方、庶民の間では神仏習合の時代が長かったのです。江戸時代の人が伊勢を見る目は、明治以降の人が見る目とはかなり違っていたのでしよう。

桑原久子さん達も、三月二日、朝熊山に登って歌を詠んでいます。

春霞ふかくたたずはあさぐまの
やまよりふじのゆきもみましを

久子

(春がすみ深くかかつていない
なら、朝熊山より富士山の雪を見
たいものだ)

今はなかなか富士山まで眺望できる日は少ないでしょうが、昔は富士山までみることもできたのでしよう。今でも伊勢湾を見下ろすことができる絶景のビューポイントです。
宅子さんも詠みます。

前は海うしろは伊勢雄朝熊(あさ
まくまなくみゆる舟のゆきかひ

宅子

宅子さんの歌は雄大です。ここでは名物の万金丹という薬を買っています。桑原久子さんは朝熊山から二見ヶ浦へ向かいます。ここで詠んだ歌が、

みしめひく二見のうらの岩むら
ふたたびみつることのうれしさ

久子

(目を引く二見ヶ浦の岩群を再び
見ることができ嬉しさよ)

次の日には二見ヶ浦の日の出を拝んでいます。夫婦岩の間に日が昇ったのでし
ようか？

名残惜しい伊勢神宮を後にして、また宮川を渡り、久子さんは詠みます。

またもこむしるしとかへり宮河の
きしねの杉のふかきみどりを

久子

(また来る時のしるしにと宮川の
岸の杉の木の高い緑を見返してお
くよ)

さて、田辺聖子の『姥ざかり花の旅笠』には伊勢神宮参拝後のことが書かれています。

御師の家から宮川のそばの川内
屋という宿に泊まりました。一三

日の間中、これからの行先の相談
になります。

ここにこしつつ、常に意表をつ
く提案をするのは久子さんです。

「ここから善光寺はそげん遠いこ
た、ござっせんけん、思い立った
が吉日、善光寺詣りに出かけまっ
しょう」

え、と一同、怪訝な顔。

反対の声もありましたが、結局、全
員一致で善光寺に行くことになりま
す。ここでも、桑原久子さんのイニシアチ
ブが発揮されたのです。

俳句

土田 裕

春暁や夢とうつつの行き交ひて
ものの芽の一つひとつに希望あり
遠富士のあるべき方も春霞
春の水堰超へる時煌めけり
コロナなぞどこ吹く風と桜咲く

影山 武司

空耳に妻の声して露の臺
指きりで別るる小径花ミモザ

砲撃の鈍き音して春の闇

沈丁花曇りがちなる古都の空

沈丁花郵便受けに文の音

青莖のぼきぼき弾けはうれん草

牧神のまじろむ昼や春の海

白雲の影を斑に山笑ふ

大空へ笑みの弾くる花辛夷

野へ山へ花を訪ねる旅にあり

編集後記

SK生

▼今年コロナもややなりを潜めて久方ぶりに
花見に繰り出した人たちもコロナ以前に戻った
ようであった。一月七日の沖縄气象台のカンヒ
ザクラ開花宣言にはじまる桜前線が北上し、根
室市のチシマサクラの開花で、その終着駅に到
着するのは五月上旬というから、およそ五ヶ月
間にわたって私たちは国のすみずみで満開の桜
のもと春の到来を喜び合うことになる。▼桜の
美しさに感動を覚えるのは我々日本人だけでは
ない。アメリカ合衆国のワシントンD.C.のポト
マック河畔に植えられている桜は有名であり毎
年春には全米桜祭りが行われコロナ前には一五
〇万人以上の観光客が訪れるほどであった。も
ちろん米国だけではなく桜は世界の至るところ
でその国の人々を喜ばせている。戦争のさなか

にある国であってもである。▼ウクライナの二
三歳のウラジスバという女性が日本の俳人に俳
句を送ってきた。ロシア語による原句は「飛び
去る 風そよぐ 桜のように 親しい人」だっ
たが俳人の黛まどかさんが中心になって日本風
の俳句に直した。その作品が「さくらさくら 離
れ離れに なりゆけり」である。戦争で肉親
友人、恋人と別れねばならない。切ない句だ。
同様に日本風に直した同じ作者の句に「地下壕
に紙飛行機や子らの春」がある。暗い地下壕の
中で子らが紙飛行機を飛ばす。そこに春の空は
なく遠くまで届くはずもないのだが子らは紙飛
行機を飛ばす。プーチンは何をしてくれたのだ
と強い怒りを感じる。▼芭蕉に「さまざまな事
を思い出す桜かな」という句がある。誰もが思
い出はいろいろとあるだろうが桜を見ながら悲
惨な戦争の記憶など思い出さなくもないだろう。
ウクライナの人々が青空に輝くばかりの桜を楽
しむ日が一日も早く来ることを願うばかりだ。

『平和万葉集』を知っていますか

平和万葉集刊行委員会編で、巻一は一九八六年八月十五日に労働旬報社から刊行された。列島を繋ぐ、十四歳から九十六歳までの一一三三人の歌（一人短歌二首）からなり、「戦火に灼かれ」、「核ゆるさじ」、「愛するゆえに」、「生活のひびき」、「拳かためて」の五章で構成された。戦後四十年の節目を越えて国際平和年を迎えた年の発行である。あらゆる領域で人間的に生きたいという「要求と現実との鋭いきしみが、人びとをさらに表現の世界へと押し出してゆく。…私たちは、その表現形式を日本の伝統的、民族的詩形式としての短歌に求めた。…自らの願いと現実を、現実とのきしみを歌いとどめることができよう、と訴えた。それを一つに結び合わせて、『平和万葉集』としよう」と訴えた。それは見事な、大きな反響としてかえってきた」と序文に記されている。

その頃私は、三十六歳で大学に就職して三年目、歌など詠まなかつたけれどもどこかから漏れ聞いたこの歌集の刊行に妙に興味をもち、町の本屋でこ

の本を探しまわったが見つからなかったことを覚えている。ワープロもなかった時代であった。

その後、この本のはずっかり忘れていたが、『平和万葉集』は巻二、巻三と不定期に発行が続いていた。私が再びこの本に出会ったのは、巻一発行後の実に二九年後の二〇一五年、巻四（二〇一六年五月三日発行）への参加呼びかけを偶然見つけた時であった。『平和万葉集』巻四刊行委員会発起人の中に、遠く京都でセツルメント活動と共にした木村雅子氏（鎌倉にある短歌結社『潮音』主宰）の名前があった。巻四の帯には、「戦後七十年の中で、もつとも重要で、あらたな展望を生みだしている、現在の歴史的状況の中、短歌の表現の力で結集した人びと一二三二人二四六三首の志」とある。歌集構成は、

第1章 戦争体験・戦後体験
語り継ぐ戦争、記憶

第2章 平和・民主主義・憲法
平和への希求と礎

第3章 基地・原発・震災
いのち脅かすもの

第4章 戦争法・国会・国民
忍び寄る足音と目覚め

第5章 暮らし・高齢介護・家族
日常の中に生きる

第6章 自然・未来
希望へつないで

私の二首は第6章に掲載された。憲法九条かたちは心であり心はかたちになる

二億年銀杏は銀杏
戦せぬ国のかたちはまだ七十年

そして、昨年八月二十五日に巻五が発行となった。「平和な暮らしを、ウイルスや戦禍がある日突然に奪ってしまふ。この不条理を短歌に捉え見つめて表現した一一二七人二二五四首のさまざまなおもいと願いの集積」である。

第1章 日本国憲法・戦争放棄
世界へおくる言葉

第2章 沖縄・反核・原発
差別と犠牲を見つめて

第3章 コロナ・政治
誰でもみんな大切に

第4章 暮らし・国民
希望を持てる日々を

第5章 平和・家族
日常に生きる

第6章 ウクライナ侵攻
ひまわりを枯らすな

第7章 戦争体験・戦後体験
語り継ぎゆく記憶

母の背に生れて二十日の妹は
眠りていたり父の征く朝（佐野暎子）

まぬがれし防空壕の古伊万里の
その群青に里芋を盛る（渋谷寿美子）

空襲に恐れ戦く（おののく）マリウポリ
「空を閉じて」と少年が言う（長田裕子）

短歌の抒情が時代を撃つことも当然あることだ、と思った。

季節の花々



椿の花手水 法然院にて



桜・木瓜・花蘇芳



デイジーの街角



ヤマブキの花



シデコブシの花